透かしを削除する Wondershare PDFelement

軍隊は住民を守らない 18

元沖縄平和ネットワーク共同代表
元全国戦跡保存ネットワーク共同代表
村上 有慶

粟国島の偽装大砲

「中国が攻めてくる」という危機感から、宮古・八重山の島々に自衛隊のミサイル関係部隊がやってきた。膨大な税金が投入され、前市長は贈収賄までして自衛隊基地建設を進めた。中国を太平洋に出さないための防衛の第一列島線という。1945年の沖縄戦と同じように、再び沖縄を「捨て石」にして、本土の安全と平和を守ろうとするのか。一触即発の偶発的事件が南西諸島で起きれば、沖縄だけではなく日本全土にミサイルが飛んでくる。基地は標的になる。

沖縄戦の中でも、教訓となる事例が多数ある。沖縄本島から西へ40キロほど離れたところに「集団自決」事件で有名になった慶良間諸島がある。渡嘉敷や座間味島では家族が相殺し合う「集団自決」が行われた。渡嘉敷島の沖縄本島寄りに、今は無人島となった前島という小さな島があった。沖縄戦の時は数十人が住み、小さな分校があった。日本軍がやってきて、島を守るため軍事基地を置くといってきた。分校の校長先生が、「軍隊が島に来ると攻撃を受けて、戦争に巻き込まれる」と主張して、島の人も賛成して日本軍配備を拒否した。この島では「集団自決」もなく、一人も戦争で死ぬことはなかった。

一方、慶良間諸島の北側に、粟国島という島がある。米軍が来ると大変だからと島の一番高い岬の先に、松の木を切って大砲に偽装して軍事基地があるという事を見せかけた。その偽装大砲をめがけて空爆が行われ、5人の島人が戦死した。

2つの島のどちらが、生活者である住民の命を守ったかは、あまりにも明らかである。

現在、沖縄県民の中にも基地建設に賛成する人たちがいる。「自衛隊員が来れば、島の人口が増えて、経済も活性化する」という。沖縄戦の体験者の中には、こんな馬鹿げたことをいう人はいない。軍事基地を金儲けにつなげ、命を代償にして「儲かれば良い」という浅はかな考えに、開いた口が塞がらない。

南西諸島への自衛隊配備は、沖縄戦時の粟国島の偽装大砲ほどの意味しかない。

沖縄本島周辺の島々